『晋書』巻三十四「羊祜傳」および『蒙求』「54羊祜識環」の故事を踏まえる。

以上、出典の明らかなものを主に例示してみた。この作品が太宰の地に突如左遷され全てから隔絶された「天涯孤独」の中で詠作されたものであるだけに、その中に詠み込まれている道真の心の支えとなるものは、周りには見出せず、道真の脳裏の中に素養として生き続けている中国古典籍の中の不遇の中で命を落としていった古人たちの事蹟しか存在しなかったものと思われる。こうした古典籍の典故を一つ一つひも解く中で、道真の太宰の地での心象風景が鮮明に浮きぼりにされてくる。まさしく道真による、漢籍の素養のあるものが読めば、必ず伝わるメッセージである。筆者はこれを「表層部分の投影箇所」と便宜的に呼称する。それは又はからずも、道真自身の漢籍への造詣の深さと摂取の傾向を改めて読み手に強く印象付けるものになっている。

換言すれば、道真の漢詩文につとに投影関係が指摘されて来た白居易の『白氏文集』を始めとする唐代の漢詩文からの投影は、この「敘意一百韻」の詩句の「表層部分」においてはなりをひそめ、先に例示したように大半が「四書五経」「正史」『文選』等の典故に拠っていることを大きな特徴とする。これは道真自身の漢籍受容の根底に「儒家」としての矜持があることを認識すれば納得出来ることである。

四

〔出典の分析（その二）～深層部分の投影考察～〕

前述で、この作品の詩句の表層部分においては、『白氏文集』等からの投影を明らかに指摘できる箇所は少な